

浜本満著

# 『信念の呪縛——ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』

九州大学出版会、2014年、8,800円＋税、534頁

近藤英俊

## 1 本書の内容

### 1-1 はじめに

本書はケニア海岸地方のドゥルマ (*Duruma*) 人の妖術 (*utsai*) に関する民族誌である。本書は私がこれまでに読んだ邦語の妖術に関する民族誌のなかで、最良のものである。それどころか、本書は妖術に関する世界的な名著と十分肩を並べられるものであると私は確信している。すなわち本書には古典となりうる資質が備わっている。ここで古典というのは、読むだに発見があり繰り返し読む価値のあるもの、したがって読み継がれていくものである。本書はその資質を理論と民族誌的データの双方においてもっている。

本書の理論的な骨子は、これまでの文化人類学理論の流れを汲むものである。しかしその枠組みのなかにあつて、本書はいくつかの独創的な議論を展開している。信念の賭博性、「現実構成的想像力」、筋書と実践を通した物語的現実の構築、「語りの反照規定的循環性」、これらはどれをとっても、思わず膝を叩きたくくなるような説得力と明晰さがある。理論家にありがちな難解な言葉づかいへの逃げ込みもなく、ときにユーモアを交え平易な文体で書かれている点にも好感もてる。読者のなかには、目からうろこが落ちるような新鮮な見地に感動を覚える者もいよう。その見解を乗り越えようと、切磋琢磨して自らの研究を向上させようとする者もいるだろう。

一方、なんといっても圧倒されるのが、本書の群を抜いて豊富で詳細な民族誌的データである。これだけ膨大な情報を主として個々の聞き取りや観察から集めた労に、同じ研究者として畏敬の念を感じる。また、インフォーマントの会話や質問に対する答えの録音記録を、それほど手を加えることなく取り入れていること、つまり本書が主としてインフォーマントの「生の声」によって構成されていることも、民族誌的叙述に臨場感を与えるとともに、本書を誠実かつ信頼のおける研究に仕上げている。

本書は妖術研究のみならず、文化人類学研究全体に大きく寄与する稀有の研究書といえる。私は本書が海外の読者にも読まれるよう英文に翻訳されることを切に望んでいる。

本書の構成は以下の通りである。

序論

**第1部 妖術の観念**

第1章 ムハツソ (*muhaso*) と妖術

第2章 夜の舞者

第3章 汚れを奪う者たち

**第2部 妖術に対する対処**

第4章 妖術の治療

第5章 妖術に対する防御

第6章 妖術告発

**第3部 妖術世界を生きる**

第7章 妖術の物語に「捕らえられる」ということ

第8章 ムァディガの復讐

第9章 証明された妖術使い

第10章 呪縛する物語

**第4部 反復する抗妖術運動**

第11章 抗妖術運動の歴史

第12章 反転する物語

第13章 バラバラの抗妖術施術

**第5部 開発と妖術**

第14章 抗妖術運動 2006

第15章 行政と妖術信仰

結論

この書評は一般の書評とはいささか異なった体裁をとりたい。前半の1では、本書の内容について比較的詳しく書くことにする。この534ページの大著は、序論、五つの部、結論からなる。ここでは序論と五つの部に関し順番に内容を要約していく。後半の2では、本書の民族誌的データをもとに、私自身の妖術に関する見解を述べる。それは、私のなかではすでに「生きられる古典」となっている本書に、私の考えを突き合わせ、擦り合わせた結果である。本書の内容にのみ興味のある読者諸氏は1だけお読みいただきたい。

**1-2 「序論」について**

本書はまず近年の研究潮流である「妖術の近代性」論を批判の俎上に載せる。このアプローチは、妖術をグローバル化が地域社会に及ぼす影響、とりわけネオリベリズムと近代国家形成に伴う社会的不平等と、妖術の関わりについて論じる。本書は、妖術が社会変化を反映するのは当たり前のことであり、妖術を抵抗や社会診断とみなすのは、当事者の見解から乖離していると批判する。そして取り組まねばならぬ研究課題とは妖術そのもの

であると主張する。

その妖術を本書は信念の一つとみる。序論は信念についての本書の理論的見解を明らかにするものである。自明な真実について「信じる」という言葉は用いにくい。信念とは命題に関し、言説空間に異論 (alternative) が存在しうる状況と関係している。言説空間に異論がなければ、「信じる」という言葉は使いづらい。それは「知る」と表現するのが適切である。本書は「信じる」と「知る」を対比しながら、これらの概念を論理的に整理する。

「信じる」には賭けの要素があるという。「彼は親友Aを信じている」という言い方は、Aを当てにしないというオプションのあることが自覚されている。Aを100パーセント当てにできるのなら、「信じる」という言葉は使わない。すなわち「信じる」とは、当てがはずれるかもしれないという不確実な状況、「世界についての複数の可能な想定のうち、どれかを『あてにする』という賭けとして眺めることができる」(19頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する)。「信じる」という賭けは、複数の選択肢のどれか一つに絞るというよりも、選択肢に応じ、当てにする度合いが違う賭けであることを前提にしている。例えば、夜間峠を自転車で越えるという場合、1) 地縛霊の存在を信じていない(大本命)、2) その存在を信じている(大穴)といったふうに、当てにする度合いが差異化するものである。実際何も起こらなかったなら、大本命当たりということになる。しかしその後金縛りにあい、お祓いすることになったなら、その人は地縛霊に対する賭けにコミットメントし始めているという。

この共通及び複数の信念のセットに人々が縛りつけられていくプロセスを、本書は信念による真理化と呼ぶ。本書の真理化の概念は、ウィリアム・ジェームズの哲学がヒントになっている。ジェームズによれば、信念の研究にとって、信念を抱くに至る契機よりも、それを抱懐した後に生じるプロセス、つまり「どこから来たのではなく、どこへ導くか」が重要であるという(21)。根拠があつて信じられるとみるよりも、むしろ信じた結果生じる現実によって根拠が後付けされ、継続的に信じられるようになるとみるべきであるという。本書はジェームズの議論を精緻にし、真理化には、信念にのっとなって行動した結果、1) 何らかの利益が得られたせいで、とりあえずその信念は正しかったと思うようになるプロセスと、2) 信念を「理に適ったもの」にする現実が生じるという、二つのプロセスがあるとみる。

本書はペシミズムや新興宗教の例を使い、真理化の過程を巧みに説明する。何をやってもうまくいかないと感じるペシμισティックな人は、実行に身が入らず、準備や配慮が怠りがちになる。その結果うまく事が運ばず、ますますこの観念に呪縛されていく。それは稜線から谷筋に下がっていくようなものだという。いったん下がり始めると重力のせいで元に戻るの難くなる。本書の課題とは、妖術に関する信念セットとそれを真理化するプロセスを明らかにすることにある。いいかえれば、妖術の信念とそれを踏まえた実践に、現実が絡めとられていくプロセスを明らかにすることにある(複数の信念セット前に、人がどのように賭け、現実を構築していくか、その信念の生態学は今後の課題にするそうである)。

### 1-3 「第1部 妖術の観念」について

第1部では妖術のやり方、その中心をなす薬ムハツソ (*muhaso*)、そして妖術使い、これらの一般的な概念・イメージをについて詳細に報告する。ドウルマは薬・毒を総称してダワ (*dawa*) と言う。ダワにはコマンドすることで特定の効果を発揮するとみなされるムヒ (*muhi*) があり、さらにムヒは三つのカテゴリーに分かれる。ムハツソはそのうちの一つで妖術使いの薬であり、妖術がもたらす病や災いの治療薬でもある。本書はムハツソの本質を不思議な力とみる。それは豊作、試験の合格から瞬間移動、動物への変身にいたる不思議な行為をやったのけるものである。日常的な不思議経験や異様な死はムハツソと関連づけられることが多い。魅力的である一方、その所持は身内の者を犠牲にせねばならないなど、代価を伴う。妖術使いが利用するとみられる代表的なものに、人の魂を瓢箪の中に拉致し病気をもたらすキブリ、屋敷の人々を仲たがい、離散させるフサ、精神に変調をもたらす、生活を困難にするフュラモヨがある。この他にも特定の病をもたらすムハツソ群がある。

一方、ムハツソは正当な理由で利用されるものもある。その代表的なものにキラボがある。キラボは盗難の予防、返却や賠償を確かなものとするために用いられる。キラボを無視した者、ないしはその親族は、病気になるか死ぬという。またキラボは妖術告発の際の試罪施術としても利用される。人を殺し得るキラボは妖術と似ていると考えられている。妖術との相違点はコマンドの仕方にある。キラボ (正当なムハツソの使用) では、コマンドの構文が、条件節「もし何者かが～したのなら、その者を捕えよ」となるのに対し、妖術の構文は「Aを捕えよ」と名指しする。本書はキラボのような施術が、妖術のイメージの元になっていると推測する。

ムハツソは「不思議 (*ririmo, rilinje*)」に属する事柄である (80)。それはドウルマの常識では理解できないやり方で、通常ありえないことを達成する。ここで本書は、理論的アプローチの根幹をなす想像力の概念を用い、妖術について分析する。常識的な現実とは想像力と実践によって構築されている。本書はこうした想像力を現実構成的想像力と呼ぶ。この想像力を通し「人々は、自分たちの住む世界がどのような世界であるか、そこにどのような物や行為主体が属しており、普通どんなふうに事が進行しどんな結果に終わるか、その世界では何が可能で何が不可能であるかについての想定を行っている」(79)。つまり現実とは、人々が、実践を通じ安心して「あてに」できると判断した想定群のことに他ならない。「堅い賭けの集合体」、それが現実である (79)。

妖術の想像力は、この現実構成的想像力のつくり出す秩序・常識から逸脱したもの、不可解なものに対する想像力である。しかしそれは、人々がありえないことを知っているファンタジーを生み出す想像力ではない。現実とファンタジーの境界域に対応した想像力である。妖術の想像力が実践を通してつくり出すものは、現実とファンタジーの双方と不断に折衝を繰り返し、「そんなことありえない」から、「もしかしたら起こるかもしれない」、「きっとあるに違いない」というように、あてにされる程度、その信憑性に幅がある (81)。この妖術の境界性はムハツソに対するコスモロジカルな位置づけにも表れているといえよう。ムハツソは材料である植物を加工したものである。それは自然に人手を加え

たものであり、屋敷＝文化・秩序と、ブッシュ＝自然・無秩序の中間的な存在である。

災厄とは、現実構成的想像力がつくり出す日常的秩序からの逸脱によって招来する。そうした逸脱は、秩序があればこそ不可避に起こるものである。その回復を秩序の遵守によって達成する代わりに、それ以外のやり方で行うもの、通常の現実的なやり方を「上書き」(83)してしまうのがムハツソである。

引き続き本書はドゥルマの妖術使いのイメージについて詳述する。彼らにとって妖術使いとは、自然物に使った秘儀的知識に精通した特殊技能者であり、人のあるべき姿から逸脱した異常者である。それはまた嫉妬と悪意を隠しもった身内、知人、隣人でもある。このうち本書がとくに注目するのは異常性である。妖術使いには際立った異常性がある。人を食べる。利己的な欲望のために身内を犠牲にする。夜全裸で術をかけにやってくる。動物に変身する、動物を使い魔として使うなど、動物との親和性についてもしばしば語られる。本来仲間である人間を食べ、本来食べる対象である動物と親密な関係がある。すなわち妖術使いは人間と動物の境界を侵犯している。こうした、ありえそうもないものから、ありえそうなものまで、様々なイメージが混在して流通し、現実の事件を絡めとる。それらはアフリカ各地や、西洋史に繰り返し登場する妖術使いや魔女のイメージともよく似ている。妖術使いのイメージとは通常の人間のイメージを反転させたもの、日常的秩序に反するものである。それはその観念を共有しないものにはファンタジーにみえる。

妖術には一般の人々でも利用できるものがあるという。それは大木、岩などのムズカと呼ばれる聖所を訪れ、相手の持ち物や毛髪などを用いて手軽に行える「汚れを奪う」施術である(114-121)。それによって相手は体力を失ったり、不機嫌になったりするという。それは妖術実践のハードルを下げるものである。

第1部を結ぶにあたり、本書は、妖術使いの「二重の不在」について言及する(122-124)。それは本書の立脚点の一つ、妖術使いは存在しないという立場を明らかにするものである。すなわち、自覚的に行為に及ぶ妖術使いが存在したとしても、その犠牲者は存在しない。妖術の犠牲者と自認する者が存在していても、その加害者である妖術使いは存在しないとする。

#### 1-4 「第2部 妖術に対する対処」について

ここでは治療、防御、告発における試罪施術、という妖術への対処の実践について扱われている。その中心的な論点は、妖術を克服するはずのこれらの実践が、かえって妖術の存在の信憑性を高め、妖術に対する信念の恒常化に貢献しているという点である。

治療は裏返す、向きを反対にするという意のクヴェンドウラ (*kuphendula*) と呼ばれる(129)。妖術使いの仕掛けたフュラモヨの治療に関して言えば、施術師は地面に図形を描き、そこに瓢箪を設置、この「罫」でフュラモヨを捕える。患者を「罫」に入れ、薬液、鶏を用い、唱えごとしながら施術を行う。興味深いのは、瓢箪に入れられているムハツソ、逆毛の鶏が、妖術使いがフュラモヨで使うのと同じものであるとみなされていることである。すなわち治療はコマンドを正反対にただけで、基本的には妖術と同じ施術なのだ。施術師は妖術使いを真似しているというよりも、「彼らの行為こそ、妖術使いについ

ての想像の現実的根拠となっている」という (150)。仮に治療効果がなくとも、妖術の方が上手だったというだけの話で、科学実験のようにその原理が検証されることはない。それは勝負の世界なのである。

防御の施術は、個人の防御と屋敷全体の防御からなる。個人の防御では、患者にムハッソを擦り込む。これによって妖術を仕掛けた者が死ぬといわれる。患者本人もうかつにムハッソを利用すると命取りになる。「妖術をかけた者を殺せ」というコマンドは、かえって妖術に現実味を与える。この施術には歩き回る瓢箪など、「不思議の見かけ」がしばしば演出されている (162)。屋敷全体の防御のために行うのが埋設薬フィンゴの設置である。その際、施術師が全裸になる、放尿するなどの奇矯な振る舞いをする場合もある。ここでも強調されるのは不思議さである。施術師は妖術使いのイメージと正反対の要素をもちながらも、部分的に重なり合っている。防御施術の効果は曖昧さを伴っている。施術後の人の死は、加害者である妖術使いが返り討ちにあったとはいいきれない。犠牲者である施術実施者が過ってムハッソを使用したせいかもしれないからだ。つまりそこには複数の解釈が成り立つ。

妖術使い、妖術の犠牲者、そして施術師の境界は曖昧である。施術師はムハッソを所有しており、それを手に入れるのに身内の者を犠牲にしているといわれている。こうした妖術信仰は、不在を核にした信念群によって構成されているという。「ムハッソの不思議な力など実際には存在しないし、それを駆使して悪事を働く妖術使いも現存しない」のである (178)。この想像上の存在でしかない妖術使いをリアルなものに感じさせるのが、施術師であり、彼らの実践、彼らの使用する薬や物なのだ。同時に妖術師をリアルに感じさせることで、施術師の妖術の治療者としての存在意義が生成されている。

妖術に対する告発は簡単に行うことができない。告発に踏み切りやすいのは、突然死や異常な病による死などの「不審な死」のケースである。その場合でも3人の占い師による、「死を探す」占いの結果が一致しないとできない。告発が受理されると、試罪施術パイヤのキラボが行われる。この施術は切り分けたパイヤに薬を塗り、それを妖術使いとみられている被告発者と、妖術の被害者を自認する告発者に食べさせるというもので、口が腫れ上がった方が嘘をついているとみなされる。彼らは「もし私が妖術をかけたなら (あいつが妖術をかけていないなら)、キラボよ私を捕えよ」といった条件節のコマンドを唱える。著者が目撃した23ケース中、口が腫れたのは、被告発者が14ケース、告発者が9ケースだった (202)。有罪となった者は大抵土地を去ることになるという。

妖術告発・試罪施術は二重の不在を解消するという。これらの施術は妖術使いを現実の個人としてつくり出す。それはある妖術使いが妖術を行使し、ある人物に災いをもたらし、そして犠牲者が試罪施術によって正体を暴いたという単線的な歴史物語に、現実を遡及的につくり変えてしまう。それは「とりあえずの結末を手に入れる契機となる」(205)。つまり想像は現実そのものと区別しがたくなる。これこそ真理化と呼ぶべきものである。

### 1-5 「第3部 妖術世界を生きる」について

第3部では妖術の物語と筋書に焦点をおき、妖術の信念内部の真理化の過程を三つの

ケーススタディーのなかに辿っていく。第4部とともに第3部は、理論的アプローチと直結した本書の中核ともいえるものである。妖術の筋書は、災厄をはじめ様々な現象や状況を関連づける。それは災厄の原因を説明し、災厄への対処を妖術使いとの対決の物語にする。筋書は起こった現象や事態に解釈を与えるだけでなく、実践の指針となる。そして実践を通し筋書の正当性が確認される。すなわち治療、防御、告発・試罪施術等の実践は、ますます現実を物語に合致したものにつくり変えていく。

最初に取り上げるのが、ルバンデ青年のケースである。ルバンデは小学校教員という比較的良い職に就きながらも、すぐに辞めてしまう。一般にはありえないことだが、本人は初めそれが異常だとは思わなかった。やがて占いと治療施術を受けるなかで、妖術を疑うようになる。そして抗妖術運動、つまり妖術使い狩りが、ムソザ老人を捕えると、ルバンデは、これまで身に降りかかったすべての災いが、ムソザによって引き起こされたと思うようになる。

2番目はムアディガ夫妻のケースである。ムアディガと妻メムランダの息子ズングが突然死んでしまう。健康そのものの子供が突然死したという異常な死のあり方から、夫婦は妖術を疑い、妖術使いを特定すべく数多くの占いを受ける。彼らは複数の人物を容疑者として疑うが、はっきりしたことがわからない。試罪施術がローチャを捕えたのを機に、彼を妖術使いと疑うようになるが、ムアディガは、施術後、夢に現れた別の人物コンボへの疑念に傾斜していく。そしてコンボの死とともに、この件について追及しなくなる。

そして第3のケースは、試罪施術によって妖術使いと確定したローチャのケースである。ドゥカ一家の3人の娘が相次いで死に、ドゥカの弟のローチャに嫌疑がかかる。パイヤのキラボが実施され、ローチャは有罪となる。このケーススタディーは複数の関係者の多様な証言から構成されており、語る内容、事実関係や解釈が一致しない羅生門的世界が描かれている。ドゥカは当初ローチャを疑っていなかった。一方ドゥカの息子のムアンジーカは、土地を巡って争ったことのあるローチャを一貫して疑い、妖術告発の急先鋒となった。いうまでもなくローチャは無実を主張した。しかしキラボで有罪が確定するや、ドゥカの屋敷の者だけでなく、地域住民もこぞって自分たちの災いをローチャのせいにした。すなわち試罪施術は「不確定性の中でひそかに語られていた様々な物語に一応のけりをつけることができる」ものである(278)。これによって「個々の登場人物の思惑とは別に、あらゆる行為、出来事がまったく別の光のもとで姿を現し、当事者が思いがけなかった意味を受け取る」のである(283)。

ここから本書は、なぜ妖術の物語が現実となっていくのか、妖術の信念の真理化がなぜ起こるのかについて究明していく。一般に、人々を妖術の物語に縛りつける決定的役割を担うのは、占いのように思われる。しかし本書はそうではないという。複数の占いを遍歴することで、かえって真相究明が困難になるからである。また占いの結果は拒むことができる。それは嘘をつくことがあるともいわれている。

呪縛化は主として物語の構造に関連しているという。物語とは筋書によって出来事を関係づけつつ展開する語りのことである。筋書は例えば「ガラスのコップを落とすと、割れる」や「雨が降ると、空から水滴が降ってくる」のように、因果関係や定義を表すものが

その最小単位となっている (295)。出来事の理解だけでなく、語りの理解においてもわれわれは筋書の助けを借りている。つまり言葉に表明されていない筋書を読み取ることで、われわれは相手の言わんとするものを理解する。

現実構成的想像力は、どのような実践がやってみる価値があるかを示し、実際にやってみてうまくいけば、現実は想像した通りとなる。筋書は、現実構成的想像力の非常に大きな部分をなしているという。例えば店での多くの事柄は、「買い物筋書」に従うと想定できる (296)。それは「あて」にしていい筋書 (強盗の筋書などよりも) である。各自筋書を想定して振る舞うことで筋書通り事が運んでいくわけだが、ここで他者の存在は無視できない。実際には自己と他者の相互行為のなかで筋書は運用される。このとき筋書の再確認や修正「マイクロチューニング」が起こる (297)。こうして日常的な現実がつくり出されていく。ところが災厄は筋書にない出来事である。それはプチ物語としての筋書の連鎖に回収しきれなくなるものである。それは特別な筋書と物語を必要とする。そこに妖術の意義がある。

妖術の物語は、身近に潜んでいる正体不明の敵意をもった他者を核として、出来事を再配置し関連づけるものである。それは日常的現実を構成する筋書では取り上げられない出来事に光を当てる。ルバンデが日常抱いていた筋書は崩壊した。この苦境のなかで、様々な出来事を回収しつつ生成されたのが、ムソザの妖術とそれへの対応の物語である。離職、病気、分別の喪失、夢のなかでの格闘、屋敷のヤギが皆死ぬ、弟の成績が落ちるなど、まったく関係なさそうなことが「無理やり」関連づけられ、現実的な物語が生成された (299)。

ドゥカとムアンジーカのケースでも、どうでもいいようなディテールが大きな意味を帯びようになる。ドゥカの長女が埋葬された後、ローチャはモンバサに鶏の商いに行き、支払いが後回しされたせいで、モンバサの次女を訪ね、食事を出されたうえにバス代として破格の 500 シリングを与えられた。そしてほどなく次女は病に倒れて死んだ。これらの一見関わりのない出来事が関連づけたのは、手厚く接待されたにもかかわらず、嫉妬深い妖術使いのローチャは次女たちの金銭的余裕に嫉妬し、妖術をかけたという筋書である。ドゥカは、ローチャが屋敷を訪問して二人の娘のことを尋ねた後、二人が死んだことを繰り返し語るが、行間から読み取れるのは妖術の筋書である。

ムァディガ夫妻の語りはあらゆる方向に迷走し逡巡する。息子ズングの突然死に彼らは妖術を疑うが、誰がかけたのかはわからない。彼らが無視できないのは、ズングが病気になったその日、ヂネの息子から 20 シリング硬貨をもらったこと、コンボが用もないのに何度も屋敷にやってきたこと、ズングが死ぬ日ローチャにタバコを買ってくるようお使いに出されたこと等々である。ズングの死とは何の関係もなさそうな単発的な出来事が、妖術の物語の中で強引に関連づけられていた。

本書はこうした呪縛する物語の三つの特性に注目する。一つは「語りの反照規定的循環性」と呼ぶものである (300-302)。妖術による災厄の語りの奇妙さは、出来事を関係づける肝心の中心の出来事、妖術そのものについて語れない点にある。妖術は観察不可能で証拠も存在しない。それは陰謀の物語の特性と共通するものである。陰謀説の面白いのは、



陰謀が様々な出来事の連鎖を説明するのだが、逆にその存在は当の出来事の連鎖によってのみ説明することができる。つまりここには両者が相互に存在の根拠となる反照規定的循環性がある。

二つ目は、妖術の物語に内蔵された「現実生成のプログラム」である(302-308)。妖術の筋書は出来事を関連づけるだけでなく、それに従って行動するよう人々を導く。そうした実践、すなわち治療、防御、告発・試罪施術は、想像上の妖術の姿を可視化する。施術に効果があることも、そしてないことも、妖術の力の証明となる。とりわけ防御施術は妖術を髣髴とさせるものである。試罪施術の結果は、物語の想定と異なった場合、物語を一瞬にしてキャンセルしうが、一致した場合、妖術使いを現実につくり出してしまふ。身近な誰かが妖術使いではないかと疑うやいなや、つまり妖術使いの物語にほんのわずか侵入されただけで、妖術の筋書を満たすような特徴や関係づけに自ずと注意が向いてしまふ。

このごく些細な事が妖術の筋書の証明となることを、本書は隣人AとBのモデルを使って巧みに説明する。このモデルでは、AがBの屋敷を通るとき挨拶をしなかったことをきっかけに、それぞれ相手の振る舞いや態度を不審に感じ、妖術の観念に呪縛されていく過程が見事に描かれている。それは両者の行動が「合わせ鏡」ようになって、妖術の物語を現実としてつくり出していく過程である(304)。こうした現実生成作用は、日本の相性の語りにもみられるという。しかし実際のところは、妖術の物語が常に現実味を帯びるわけではない。実践の結果や状況の変化に応じ、それは解消する場合もあれば、忘却された後復活する場合もある。

ドゥルマ社会において、人々は過去に形成された相互猜疑と悪意の網の目の中にすでに生きている。そこには妖術の物語が現実味を帯びる人間関係がある。大抵の人は自分に危害を加える妖術使いに、一人や二人思い当たりがあるという。しかし彼らは誰が誰を疑っているのかを驚くほど知らない。それは三つ目の妖術の物語の特性、コミュニケーションの遮断に起因するものである。ドゥルマは妖術を疑っていることを知られないようにする傾向がある。なぜならそれが知られると、妖術使いに先手を打たれるかもしれないし、不当な嫌疑をかけられたとして告訴されかもしれない。したがって妖術の物語は、独り相撲的で互いに照合されることがなく、当事者ごとに異なる物語が形成されやすい。

#### 1-6 「第4部 反復する抗妖術運動」について

ケニアのコーストプロバンスでは、数年に一度、地域ぐるみで妖術使いを狩り出し一掃しようとする抗妖術運動(anti-witchcraft movement)が起こる。この運動は基本的には既存の施術からなるが、妖術使いを名指しする、捕える、あるいは道具を押収するといった独自の活動を伴う。第4部の中心的課題はこの運動がなぜ反復されるのか、それを解き明かすことにある。本書が目するの、妖術の物語の特性とコミュニケーション空間の属性である。

抗妖術運動の歴史は浅い。始まったのは植民地時代以降のことである。この運動には二つのタイプがある。本書がAタイプと呼ぶものは、埋設薬を使い、妖術を封印するもので、妖術使いの正体は暴かない。Bタイプはケニアが独立した1963年以降行われるよう

になったもので、妖術使いを個別に狩り出し、検挙し、術を封印する。Bタイプは妖術についてあまり口外しないドゥルマの社会にあつて異質な活動である。本書は人々の記憶に残っている抗妖術運動を振り返り、抗妖術運動史を概観した後、AとB両タイプの運動から、それぞれ一つずつケースを取り上げ、詳述する。

第一は近年最も有名な抗妖術運動でAタイプのマジユトの抗妖術運動である。マジユトが抗妖術施術を設置した後、妖術使いは攻撃すると身体が腫れ上がって死ぬといわれた。その一方で普通の人々がムハッソを使用しても死ぬと考えられていた。著者はマジユトが調査地キナンゴで活動した2年後の1986年に、聞き取り調査をしている。このとき人々は妖術はなくなったと嬉しそうに語った。彼らによると、多くの妖術使いは身体が腫れ上がり出血して死んだという。こうした不審な死は、それまでは妖術使いの攻撃の結果、つまり犠牲者の死として語られてきたのだが、この運動ではそれを妖術使い自身の死、つまり加害者の死として語る。つまり物語が反転しているのだ。それは妖術物語の本質である合わせ鏡の構造があることを示唆している。ところがこの反転は矛盾を伴っていた。

1989年に著者がキナンゴを再訪した際、人々はマジユトの活躍をどこか回顧調に語るようになっていた。そればかりか人々は新たな物語についても語るようになっていた。一つは、多くの人々が埋設薬の使用を止めていたが、正規の引き抜きをしていなかったせいで、「食べ物」を与えられず放置されていた埋設薬が精霊ジネとなり、人々を殺し始めたという物語(359)。もう一つは、盛られたとたん人の内臓を切り裂いて殺す妖術まがいの毒、カウシャの噂話だった。そして遂に占い師が、妖術による攻撃について語り始める。1991年にキナンゴを訪れた折には、元の通り妖術の物語が語られるようになっていたという。なぜ抗妖術運動の成功談がやがて元の妖術の物語に戻ってしまうのか、本書はその要因を妖術信仰の中に求める。

これまで抗妖術運動の研究は、その発生の原因を、政治、経済や社会状況に求めることに始終してきた。これに対し本書が着目するのは、妖術信仰は妖術を必要とするという信仰の本質である。妖術の物語装置が機能する大前提は、妖術使いの存在である。人々にとって妖術使いが一扫されるのは望ましいことだが、そうなってしまったら物語装置は自壊してしまう。人生において不可避に訪れる不審な死や災厄は、いずれにせよ説明されねばならない。しかしその不審な死が妖術の犠牲者の死ではなく、妖術使いの死とみなされるのは遺族にとっては耐え難いことである。ようするにそれは人々が望む物語ではない。つまり彼らにとって妖術の物語は必要なものなのである。これが妖術の物語が回復せざるをえない要因である。

本書がBタイプの抗妖術運動の事例として取り上げるのは、著者が実際に目撃した施術師バラバラの抗妖術運動である。1991年から1992年にかけて調査地ではバラバラの常軌を逸した活躍ぶりがしきりに噂されていた。バラバラが妖術使いの容疑者を捕縛する模様を目撃した人々は、バラバラがやってのけた驚くべきことを次々と実況中継のように語った。著者は伝説が生成されていく過程に立ち会っていたという。ところが著者が実際に観察したバラバラによる捕縛劇は面白みに欠けるものだった。

そのうちの一つがペンデカのケースである。バラバラはペンデカの息子ンデカの招聘で

来訪し、ペンデカの屋敷を抗妖術施術の本部として使っていた。ところがバラバラはペンデカを妖術使いとみなしたのだった。バラバラによれば、ペンデカは自分の妻（招待者の母）を殺したばかりか、子供たちを職に就けないようにした。容疑を否認するペンデカに、バラバラはそれを執拗に認めさせ、クハツアという妖術を打ち消す施術をさせようとする。このこう着状態は、居合わせたペンデカの年頃の孫娘が嫁いでいないことにバラバラが言及したことで、唐突に破られる。話題はこの孫娘の問題にシフトしてしまう。父親のことを疑いながらも、なんとか救いたい子供たちは、この話に便乗し、ここにペンデカが不用意に行った何らかのことが、知らぬ間に孫娘の結婚を阻んでいるという物語が生まれていく。それはペンデカも受け入れられる内容だった。結局バラバラは、不承不承この物語に沿った解決に同意することになる。いわゆる玉虫色の解決である。

別のバラバラによる捕縛劇も期待を裏切るものだった。とくに聴衆の参加がなかったものは不調に終わっていた。どうやら群衆の参加が、Bタイプの妖術運動成功の鍵を握っているようだった。その一方で盛り上がり欠く抗妖術施術も、巷の噂の中ではおどろおどろしいものに変わっていた。ところがこの強力な施術師バラバラの物語もすぐに変化していく。

当初調査地ではバラバラが妖術使いを圧倒する物語ばかり流通していた。ところが最強の妖術使いとして知られるジェファの屋敷の探索を、バラバラができなかったことを機に、物語の転調が始まる。バラバラが調査地を後にすると、バラバラの敗北の物語がしだいに流通するようになる。そしてついに、バラバラは妖術使いに殺されたと噂された。バラバラの施術の効果、その物語には持続性がなかったのである。本書はこうしたBタイプの抗妖術運動にも反復される構造があるとみる。

Bタイプの運動は地域の「妖術使い」を捕えきることができない。捕えられる「妖術使い」はごく一部であり、それが個々の人々が嫌疑をかけていた人物であるとは限らない。ジェファのような有名な容疑者であっても、実際に被害に遭って訴えた者は一人も見つからなかったという。一部の容疑者を除き、容疑者について人々の間にコンセンサスがないのである。ここには他人に妖術のことを明かさない、ドゥルマの慣習ともいえるコミュニケーションの遮断がある。その結果、Bタイプの抗妖術運動の効果は持続せず、やがて運動は反復していくことになる。しかしながら本書は、こうした限界にもかかわらず、抗妖術運動は両タイプとも「未決のまま宙ぶらりんになっている地域の多くの物語に決着をつけるきっかけを与える」とみる(421)。そして個々の妖術の物語を広範囲にわたって周期的に「リセット」するもの、それが抗妖術運動であると結論づける。

### 1-7 「第5部 開発と妖術」について

抗妖術運動は、ドゥルマの妖術をめぐる諸観念や実践になじまないところがある。それにもかかわらず、それはなぜ繰り返し行われるようになったのか。今度はこの課題を、植民地時代以来の地方行政、新たな政治制度、そして開発と、妖術との関わりに焦点をおき解明する。植民地時代から今日にいたるまで、地方行政は開発の妨げとなる妖術の根絶を目指しながらも、現実的な妥協を強いられてきた。この姿勢が抗妖術運動の反復と密接に関連している。第5部では2006年に起こった二つの抗妖術運動を吟味した後、抗妖術運

動への植民地行政の対応を歴史的に辿っていく。

二人の施術師カロロとマンガレの抗妖術運動は、A B二つのタイプの要素を併せもったものだった。基本的な施術の仕方は従来通りのものだが、カロロは明らかにトリックを用い、マンガレは裸になるなどの演出が目立っていた。本書が着目するのは、1) 妖術が学校教育の妨げになっており、地域の発展のために抗妖術施術が必要であることが、標語のように説かれていたこと、2) 施術にいたる手続きや施術の進め方に行政システムの模倣がみられること、すなわち委員会の設置、行政からの許可書の取得、施術師協会の会員証をもった施術師の招聘、証拠の押収、等々がみられること、3) 告発のターゲットに経済的成功者が多いこと、彼らが政治的上層部とのつながりがあるせいで、行政と衝突しがちであること、しかし4) 政治的エージェントは一枚岩ではなく、抗妖術運動を止めさせようとする行政官と、協力的な代議士とに分裂していることである。

次いで本書は、ケニアにおける地方行政と妖術の関係の歴史研究に踏み込む。植民地政府にとって妖術信仰は、キリスト教化と文明化の妨げになる迷信以外の何ものでもなかった。行政官は妖術を植民地統治上の様々な困難や低開発、例えば賃労働者化が捗らないことや反乱の原因とみなした。1925年に妖術信仰を取り締まる妖術法(Witchcraft Act)が制定される。この法令は修正を加えられ今日まで施行されている。妖術法は、妖術使いは実在しないことを前提に、妖術使いのふりをしている者を犯罪者として取り締まる。取り締まり対象には施術師も含まれ、妖術告発も禁止された。したがって施術師による治療や妖術使いの告発はおおっぴらにはできなくなった。人々にしてみればそれは妖術使いに見方する法であった。こうして施術は地下に潜ることになるが、それは行政官に不信を抱かせ、政治的な反抗とみなされることもあった。

植民地行政は中央集権的であり、総督からコミッショナーを経て末端のヘッドマンにいたる指揮系統は上意下達であった。植民地行政にとって住民は基本的に支配の対象でしかなく、彼らのおかれた状況や事情が斟酌され、行政に反映されることはなかった。ところが妖術法の施行が、皮肉なことに行政側に妖術信仰の根深さを認識させることになる。この法によって妖術への対抗措置が禁じられたせいで、住民の間の妖術問題が深刻化し、行政に苦情が寄せられるようになったのである。それは経済発展を推進せねばならない行政官にとって無視しえない問題となった。こうした政治状況を背景に抗妖術運動が登場することになる。

植民地行政官は抗妖術運動に許可を与えるようになった。それは「迷信的信念そのものを逆手にとって、人々の妖術に対する迷信的な恐れを取り除くことならできるのではないだろうか」という対処療法的な発想に基づくものであった。すなわち植民地行政は、随時行える施術を禁止する一方で、「地域ぐるみの抗妖術運動というまったく新しい制度を作り出してしまった」のである(476)。この運動は行政的手順を踏んで行われることや、施術に必要な経費を募金で賄うことなど、共同体的事業の相貌をもつようになる。この過程で妖術使いは共同体の敵、すなわち発展の敵という新たなイメージと結びついていった。

独立後、ケニアの地方行政は、植民地時代のしくみを基本的に踏襲した。ケニアアッタ大統領の治下、中央集権的な行政システムがさらに拡充した。こうしたなか、エリートであ

る行政官は妖術信仰に不寛容な態度を取っていた。その一方で独立後ケニアでは、選挙による国会議員の選出という新たな政治制度が生まれた。興味深いのはこうした代議士の妖術に対する態度である。彼らはエリートの一員として、行政官とともに妖術の不在について語る事ができた。ところが彼らは地域住民の代表でもある。彼らは妖術問題に理解を示し、抗妖術施術実施の許可を獲得すべく、非妥協的な行政官と折衝することもあった。その結果、抗妖術運動は反復していくことになる。両義的なポジションの政治家が、地域住民と行政の間に介在することで、両者の語り口が擦り合わされる契機がなくなったという。これによって住民の信仰が否定されることも、行政側がその信仰に理解を示すこともなくなったとみることができよう。

## 2 妖術に関する一試論——本書に触発されて

### 2-1 はじめに

本書は、妖術信念の真理化の過程を、詳細な民族誌のなかでみごとに描き出している。冒頭で述べたように、それは妖術に対するわれわれの理解を深め、妖術研究に多大な貢献をするものである。私自身この研究から大いに学び、大いに刺激された。ここでは本書に触発され、書かずにはいられなくなった私なりの妖術論を披露したい。この拙論は本書の批判的検討を目的とするものではない。私の勝手な思い込みもあろうが、この豊穡な民族誌のなかには、私の妖術に対する見方と密接に関連したマテリアルが随所にみられた。またその箇所に関する本書の考察も、私の見解にある程度まで引き寄せることが可能だった。拙論が依って立つのはこうした部分である。そしてそれは人々が構築する妖術的現実の特性、その様相とでも呼ぶべきものと関連している。

本書の主要な論点、妖術信念の真理化の支柱をなすのは、想像力に依拠した筋書と、筋書に沿って構成される物語、そしてその物語を現実化する実践である。これらは信念一般の真理化に関する理論的枠組みに沿って分析されている。もちろん本書は、妖術の筋書が、現実構成的想像力の筋書の成り立たない災厄に向けられた筋書であり、筋書の核となるムハツが現実構成的秩序から逸脱した不思議の領域に属するという、きわめて洞察力ある指摘をしている。しかしながら、そうした特性をもった妖術信念の真理化も、基本的に筋書、物語、実践による現実構築という信念一般の真理化の過程を辿るものとみなされている。それはペシミズムの信念でも、ネオリベラリズムでも、血液型でも、諸々の常識と呼ばれる信念でも起こる過程である。いいかえれば、妖術の筋書が現実構成的秩序から逸脱した不可解な事態に向けられていることが指摘されながらも、それが物語のあり方にどのような特性をもたらしているのか、物語と不可解な事態の間にどのような相関関係があるのかは、本書の中心的課題を構成していない。これから私が突き詰めたのは、この現実構成的秩序や個人的常識では捉えがたい不可解な事態と妖術の関係であり、妖術がそうした事態と結びつくことで構築される現実の意味、その存在の様相である。私の論点を簡略に示すなら以下のようなようになろう。

想像力に依拠した筋書に当てはまる物語が、実存状況において生成されたとき、その物

語は現実となる。これが真理化の過程とみなしうるのは、生成された物語＝現実疑問の余地がないからである。疑問の余地のない現実とは、そうであることに必然性のある現実である。反対に筋書が当てはまらない不思議な事態とは、そうである必然性のない状況、偶然的状況である。この偶然的状況に当てはめられるのが妖術の筋書である。偶然的状況は妖術の筋書に合わせ、物語として編集されていく。そして物語は施術などの実践を通し疑いもない現実となり、必然性を獲得するはずである。ところが興味深いのは、この真理化の過程において、妖術の筋書は、不可解な偶然的状況に対する人々の意識や注意力を喚起してしまう点にある。妖術の筋書は偶然的状況と結びつけられ、妖術的必然性になるべきものであるが、そのために自らと結ばれる対象、すなわち偶然的状況を探し出し、つくり出してしまふ。こうして生成される物語＝現実とは、妖術的な必然性を獲得しながらも、不可解な偶然性を帯びた現実となる。妖術の現実を生きるとは、偶然と必然の同一化が帰結する存在の様相を生きることである。

私には本書の豊富な事例が示す人々の生き方、妖術の物語をつくり、施術を実践する人々の姿に、これらの点が顕れているように思われてならない。以下この点について具体的に論じていきたい。ここでは主として3部と4部を振り返るが、他の部についても関連箇所には適宜言及する。

## 2-2 物語の出来事性

本書において信念の真理化の過程とは、主として物語の構築の過程を意味する。ここでいう物語は、人間が想像力に依拠した筋書と実践を通してつくる現実のことである。それは第一に、日常的で当たり前の現実を構成する物語、本書が現実構成的想像力と呼ぶものがつくる物語のことである。本書はこの現実構成的物語と対比した場合の、妖術の物語の特性についていくつか重要な指摘をしている。しかしながら、ここでは私なりに重要だと考える妖術の物語、すなわち妖術的現実の特徴について述べてみたい。それは一言でいえば妖術の物語は出来事性が強いということだが、それには、1) 仮定法的な語り口、2) 情緒的リアリティ、3) 断絶的变化、4) 多様化・個別化、そして5) 施術による物語の死と再生という五つの要素があると考えられる。

### 1) 仮定法的語り口

妖術の物語は、「もしかしたらAかもしれないが、Bかもしれない」といった仮定法的語り口を、程度の差こそあれ帯びている。それは別の物語があること、オルターナティブがあることを前提とした語り方である。仮定法的様相が第3部の三つのケースのなかで最も顕著に現れているのは、ムアディガ夫妻のケースだろう。ムアディガ夫妻は、息子ズングの突然死という苦境のなかで、妖術使いの正体をめぐりいくつかの可能性を長期にわたって逡巡した。彼らが複数の容疑者に対して抱いたものは嫌疑であって、それ以上のものではなかった。ルバンデ青年の場合、バラバラの施術がムソザ老人を捕えたことで、彼は最終的にムソザが下手人であることを確信するが、当初は妖術のことすら念頭になかった。妖術を疑うようになってからも、複数の占いを試すうちに妖術使いを特定できなく

なった。三つのケースのなかで、妖術使いの正体に関し、一人の人間を一貫して疑っていたのはムアンジーカだけである。また假定法的様相は、試罪施術や抗妖術施術における自白にも表れている。ローチャもペンデカも、妖術の行使を認めながらも、その語り口は、知らないうちにバコ（呪詛）を被害者にかけてたかもしれないという假定法的な言い方である。

一見断定的な語り口をもっていそうな施術師も、条件節で語ることが多い。つまり「もし～ならば、○○せよ」といった、オルターナティブを前提にした語り口である。「これ以降、人がムハツソとともに、カハソの名を口にすることがあればお前キテマよ、その声を切り裂け、引きずり下ろせ」（155）、「妖術使いは他でもないジャワだというのであれば、お前マフンカよ（中略）お前たちの肉はジャワだ」（195）。この点は試罪施術の被告発者及び告発者の語り口も共通する。「もし本当に私が妖術使いであるというなら、キラボよ私を捕えよ」（198）。施術師は、患者にもたらされたフュラモヨの種類を特定する必要がある。しかし実際にはそうすることができない。施術師はそれを正直に認める。すなわち「果たしてゾウのフュラモヨなのか、私は知らない。彼女が道端のフュラモヨをかけられたのか、私は知らない」（131）。したがってコマンドのなかでは、可能性あるフュラモヨがすべて列挙される。さらに占い師がムブルガ占いで示す語り口も、曖昧で暗示的である。この曖昧な占い師の答えを、クライアントが自分の疑念と関連づけ勝手に解釈していく。

## 2) 情緒的リアリティ

妖術に関する語りや実践はときに強い情緒を伴う。それが最も顕著なのは、試罪施術や抗妖術施術にみられる憎しみや怨みの吐露、怒りの感情である。しかしこうした公的な施術はそう頻繁に行われるわけではない。妖術によってしばしば喚起されるのは、驚きであると思われる。ここでいう驚きとは、「驚嘆」のような強い感情だけでなく、日本人が「おや？」と発話する際の心情に近いものも含まれよう。それはよくわからない、不可解な事態との遭遇に起因する情緒である。妖術が想念されるきっかけとして重要なのは、災厄である。災厄は不可解かつ理不尽なものであり、驚きの感情を喚起しやすい。本書からは必ずしも明らかでないが、この驚きの情は不安や恐怖の情にも関連しているとみていい。あつてはならない不幸を驚きとともに経験したものは、将来もまたあつてはならない不幸が起こりうる可能性を懸念しがちになろう。さらに驚きは憎しみや怨みとも結合しやすいと私は考えている。不可解で理不尽な不幸をもたらしたもののへの怨みは尋常なものではなかろう。ムアディガ夫妻の長期にわたる憎しみは、健康な子供の突然死という理不尽な不幸から沸き起こったものではないか。

いうまでもなく、こうした情緒は実際に起こった事態に対し抱くものである。しかし興味深いのは、情緒に駆られるということが、反対に、妖術や施術のリアリティを増幅しているかのように見える点である。このことを如実に示すのは、バラバラの抗妖術施術を目撃した人々の語りである。彼らはその模様を「実況中継」のように語った（373-385）。それは「ファンタジーのドライブ」がかかった驚くべきエピソードから成っていた（374）。

このとき聞いている側も、そして語っている本人たちも、バラバラの施術の凄さや、仕掛けられた妖術のおぞましさをまさに実感していたのではないか。つまり妖術や施術のリアリティは、情緒に駆られる「今、ここ」において獲得されている。逆にいえば、強い感情を喚起しない語り口や施術のやり方にはこうしたリアリティがない。この点はバラバラの施術が、聴衆を巻き込み、彼らの激情を喚起したときにはうまくいっているが、それができなかつたときは施術も失敗していることとも関連しているように思われる。

### 3) 断絶的变化

妖術の物語は顕著に変化する。外部の観察者からすれば、変化の前と後とでは内容の整合性に矛盾があるような場合もある。妖術使いの噂のあるベムツェシ老人の殺害の物語では、近隣の人々から金をもらった孫息子が、老人をマチューテ（鉈）で殺したと噂された。しかし、ほどなく話は、孫息子が襲ってきたライオンをマチューテで殺したところ、ライオンはベムツェシ老人に姿を変えたという話に取って代わられる。

マジユトの抗妖術運動では、相次いで起こった不審な死に関し、人々は妖術使いたちが死んだのだと、施術の絶大な効果について語った。しかし数年の内に、埋設薬フィンゴを正規に引き抜かなかつたせいで、フィンゴが精霊ジネに変身し人々を襲い始めたという物語や、カウシャという人の内臓を切り裂く毒の物語について語られるようになる。やがて不審な死を妖術使いに起因させる元の物語が回復してしまう。バラバラについても、妖術使いを圧倒するともつぱら評判だったが、やがて妖術使いに敗北したと語られるようになり、最後は妖術使いに殺されたと噂された。

妖術の物語の変化は、人々が語り合う最中、複数の物語が交渉するその時その場においても起きている。バラバラが息子たちの前でペンデカを追及する場面において、バラバラは、妖術使いであることを否認するペンデカを、妖術によって息子たちから仕事を奪ったという筋書に沿って追及する。これに対しペンデカは息子たちを罵ったことを認めながらも、故意に妖術をかけたことを否定する。このこう着状態を破つたのは、新たな物語の唐突な生成である。すなわち居合わせた孫娘がペンデカの妖術によって嫁ぐことができないでいるという、3者が相乗りできる筋書へのシフトが起こっている。

これらの変化に特徴的なのは、それが当事者も予期できないようなかたちで起きている点にある。マジユトの施術で妖術使いは死んだと語っていた人々が、後に埋設薬が精霊に変身し人を襲い始めたと語るようになり、バラバラの勝利に興奮していた人々が、今度はバラバラの敗北について語るようになった。こうした唐突な変化は物語の一貫性を奪うものであり、断絶的变化とでも呼ぶことができようか。しかし注意すべきは、おそらく当事者は、物語の一貫性や物語と物語の関係性には関心がないという点である。どうやら人々にとって物語の現実性は、それを生きているまさに最中に感じられるもの、現在時制的な性質をもっているように思われる。変化前の物語は、ちょうど変化後の現在の物語がそうであるように、当事者がそれを生きていた時点では紛れもない「現実」であつたに違いない。ようするに彼らの主たる関心は「今、ここ」にあるのではなからうか。



#### 4) 多様化・個別化

同一の事態に関して生成される妖術の物語が、個人や屋敷によって違うことも珍しくない。キメラは、妻の病と自殺未遂、その他相次ぐ災いの原因を、隣人のムンガとムンガの第3夫人の妖術を疑い、妖術告発を試みる。しかし結局のところ長老はそれを取り合わず、告発は不成功に終わる。それはこの件についての、長老を中心とする村人の見解と、よそ者であるキメラ一家の物語との相違を示唆するものである。B屋敷の相次ぐ災いについて、B屋敷の住民であるNクランのメンバーは、Kクランのなかに妖術使いがいると疑っていたが、KクランではNクランの内輪もめと解釈していた。本書ではこうした相違は、妖術の物語が基本的に秘匿されるものであり、複数の物語が突き合わされることがないこと、つまりディスコミュニケーションに由来するとみる。この考察はまったく正当なものだろう。しかしながら妖術の物語の個別化は、同一の家族や屋敷のなかでもある程度起きている。ムアディガ夫妻は、息子の突然死に関し、殺害の下手人として夫はヂネを疑い、妻メムランダはコンボを第一容疑者とみた（ヂネのことも疑っていたが）。ルバンデのケースでは、母親は占いを通しムソザが妖術使いである可能性を示唆したと考えられるが、その時点では本人はそう考えなかった。3人の娘の相次ぐ死について、息子のムアンジーカとは異なり、ドゥカは最初からローチャを疑っていたわけではなかった。

#### 5) 施術による物語の死と再生

妖術の物語に顕著な仮定法的様相、情緒性、断絶的变化、多様化・個別化があるとしても、最終的には抗妖術運動と試罪施術が、公的で正しい解釈を与え、いわば決定版の物語をつくり上げているかのようである。「抗妖術運動は、試罪施術同様に未完のまま宙ぶらりんになっていた地域の多くの物語に、決着をつけるきっかけを与える」（421）。ところが抗妖術運動に関する限り、施術後も物語が変化し続けている。つまり物語に決着をつけるといっても、結局それは一時的なものである。このことはどう理解したらよいのだろうか。

ここで先に触れた妖術の物語の変化の特性、物語の一貫性を奪う断絶的な変化に着目したい。抗妖術施術はこの断絶的变化を公的かつ大規模に引き起こすものとはいえないだろうか。抗妖術施術によって正しい物語がひとまず完成する。その後の事の成り行きに人々は再び物語をつくり始めるが、そうやって生成される物語はもはや別の物語だとはいえないだろうか。つまり施術と、その後の事態との間には断絶があるように思われるのである。新たに生成される物語もやがては次の施術によって上書きされる。つまり抗妖術施術は、いわば一話完結の物語をつくるのではないか。本書が抗妖術施術は個々のどろどろとした妖術の物語を「リセット」というのは、正鵠を射た表現である。しかしながらリセットされる物語とは完結した物語である。このリセットによって一つの物語が完成すると同時に次の物語に道を譲るのである。

本書は抗妖術運動が反復されることを重視している。その原因は、Aタイプの場合、妖術使いを一掃するという施術の目的が、妖術信仰と矛盾することに求められる。つまり妖術信仰には原理上妖術使いが必要である。Bタイプの場合は、妖術使いの情報は元来秘匿

されるものであり、抗妖術運動をもってしても、妖術使いをすべて探し当てることはできないことに反復の原因を求めている。私はこの分析の正当性を疑うものではない。しかし抗妖術施術は、その結果やその後の成り行きを待つまでもなく、それを行った時点で物語を終了させる性質をもっているのではなかろうか。それは個々の様々な物語を公的な物語に挿げ替えることで、とにもかくにも物語をいったん終了させる。それによって用意されるのは、未知なる未来への再出発点である。すなわち物語の死と再生を循環させるもの、それが抗妖術施術なのではないか。こうした物語を生きる人々にとって、人生とは施術ごとにやり直されるものである。妖術の物語は、しばしば苦境におかれた人々の物語である。施術によって苦しみの物語にひとまず決着をつけ、彼らは生き直そうとしているのかかもしれない。

まとめるなら、妖術の物語は、1) 語り口が、オルターナティブがあることを自覚した仮定法的なものである。2) 妖術のリアリティは認知されるというよりも感じられるものであり、その感情に駆られたその時その場のものである。とりわけ不可解な事態が喚起する驚きの情緒が妖術リアリティの源泉となっている。3) 妖術の物語は、それを生きる者も予想できないような内容上の変化を遂げやすい。4) 妖術の物語は、多様化・個別化しやすい。5) 試罪施術と抗妖術施術は、公的で「正しい」物語を生成する。しかしそうした「真理」は一話完結の物語のなかだけの真理である。施術は物語に信憑性を与えると同時にそれを完結させてしまう。そして施術の結果とその後の成り行きが新たな物語と、それにふさわしい別個の「真理」を生み出す。

私はこれらの妖術の物語の特性を、妖術の物語には強い「出来事性」があると言で表現したいと思う。出来事とは始まりと終わりがあるものである。出来事の内には筋書があり、その筋書に沿って物語＝現実が構築されている。重要な点は、出来事が、出来事以前に起こった事と、その後起こる事との強い結びつきをもたないこと、物語は1話で完結することである。出来事は基本的に個人の経験である。日常生活においてわれわれは無数の小さな出来事を経験するが、その大半をあまり意識することもなく忘れていく。記憶に残る出来事とは、日常のルーティンとの断絶が明瞭な出来事である。すなわち以前と以後との関係性が弱ければ弱いほど、さらに他人が経験しそうな事柄であればあるほど、出来事は忘れがたいものになる。そうした出来事は、現実構成的秩序や個人的常識がうまく当てはまらない。つまり当然視できるものが少なく、仮定法的に事態は認識されがちになる。それは「認識」以前に「感じられる」世界である。したがって出来事は感情が揺さぶられた経験として記憶される。それでは妖術の物語の出来事性はどう説明すべきだろうか。ここで私は、妖術とは密接不可分の現実構成的秩序から逸脱した領域について考察したい。

### 2-3 不可解な物語——現実の兆化

妖術の物語が当事者の家族、屋敷、親族、村落、その他諸々の人間関係、彼らを取り巻くミクロからマクロに及ぶ様々なレベルでの政治経済状況、そして人々の帰属や道徳のあり方と密接に関連しているのはいうまでもない。しかし妖術の物語の出来事性に関して重

要なのは、妖術の観念が、人々にとって当たり前でない事態、不可解さや不自然さ、あるいは理不尽さを感じる事象や人物と結びついている点である。

ドゥルマは災厄との遭遇を契機に妖術を想念することが多い。災厄とは現実構成的想像力の依拠した筋書、つまり通常の筋書が成り立たない状況である。この点はわれわれにとっても同じことである。災厄は一般に「よくわからない」状況としてまずは経験される。この突然放り込まれ、受動的にならざるをえない状況のなかでは、「なぜ今ここで私がこんな目に遭うか」と自問したところで、答えが用意されているわけではない。今後とるべき方針や手段についても高い不確実性がある。本書は、この通常の筋書が当てはまらない不可解で理不尽な災厄に、当てはめられるのが妖術の筋書だとみる。私はこの卓越した洞察を敷衍したいのである。すなわち、災厄後も妖術の筋書が主として当てはめられるのは、通常の筋書が当てはまらない不可解な事態ではないかと主張したいのである。

本書は、妖術の筋書が照らし出し関連づけるものが、「ひとつひとつをとれば平凡な、私たちの目には無関係であるように見えるそうした出来事」だという。しかしながら一見すれば些細な、とるに足りない物事や人の態度も、当事者にとっては奇妙なもの、怪しく解せないものに映っているのかもしれない。災厄の不思議さは人々に妖術を想念させる。そしてひとたび妖術が想念されると、今度は人々の関心はもっぱら事象や人物の不可解さや怪しさに向かうようになるのではないか。妖術の物語とは、妖術を核に構成される不可解な物語であるように思われるのだ。

ルバンデ青年の妖術の物語は、彼が教員という恵まれた仕事を捨ててしまうという、不可解な不幸に端を発している。しかし発端だけでなく、この物語には全体を通じて不可解な要素が散りばめられている。「誰かと格闘している夢」、「周りの人々から独り離れて不機嫌に黙っているようになった」、「屋敷のヤギが皆死んでしまった」、「弟がセカンダリ時代に成績が落ちて落第した」等々のことは、ファンタジーのような異様さに欠けるものの、当のルバンデにしてみれば解せないことばかりなのではなかろうか。あるいは一つ一つをとってみれば不思議さの度合いは低くとも、そんなことばかり続いていたら、やはり不可解なのではないか。

ムァディガ夫妻の妖術の物語は、健康な子供ズングの突然死と、それに続く村の二人の子供の死という、不可解で理不尽な不幸に強く動機づけられている。物語はこの不幸を引き起こした妖術使いの特定の物語として展開していくが、物語の主人公である夫婦が注目するのは容疑者の不可解な行動である。彼らの関心事とは、妖術使いの噂のあるヂネの子供から、20シリングを受け取ったその日に息子ズングは突然死したこと、ズングが死ぬ前、用もないのにコンボが何度も家にやってきたこと、ズングはローチャにタバコを2本買ってこよう言いつけられ、戻ってきたその夜死んだといった、人々の不自然な行動である。特定の行動内容が妖術と関連づけられるのではない。行動内容はどうあれ、そこに不可解さや怪しさがあるということが、妖術使いを疑う根拠となっている。

こうした不可解さには、不穏な事態が立て続けに起こるといった継起性や、災厄が起こったその時（あるいは直前直後に）、容疑者が不審な行動をとったという、奇妙なタイミングの符合が含まれる。ドゥカとムアンジーカにとって、娘一人の死もあってはならぬことだ

が、それが3人続くとなると異常という他ない。二人はローチャを妖術使いとして疑うが、その根拠は、一人目の娘の葬儀からまだ間もないあるとき、ローチャの売店にトウモロコシの粉を買いに行くと、ローチャが「また埋葬があるだろう」と言ったこと、さらにこの頃、ローチャはモンバサに住む二人目の娘のところに金の無心に行き、500シリングもの金をもらうが、それからほどなくこの娘が本当に埋葬されることになったことなどである。

妖術について懸念する人々は、意識的に事象や人物の不可解さを探しているかのようにある。私はこうした不可解さを帯びた事態を「兆」と呼びたいと思う。兆は「よくわからない」ことである。それは現実構成的常識や個人的常識による理解を超えた不可知性を帯びている。したがってそれはまず驚きの情を喚起する。しかし兆は「わからないが、何かある」と思わせるものである。不可解なことを引き起こす何にもものかの存在を、暗示するものである。この兆からドゥルマは妖術を想念するわけだが、実は、想念するものが妖術である必要はない。本書では扱っていないが、それは憑依霊である可能性もある。占いをする一つの理由は、兆が暗示するものを特定することにあると考えられる。

ここで強調したいのは、何か特定の兆的な事柄があるというよりは、あらゆる事柄が兆になりうるという点である。上記の例も示しているように、当事者が兆と受け取る事態の種類・内容に限定はない。ムソザ老人の気さくな冗談にも、ローチャの辛辣な発言にも、おそらく不自然さや怪しさは見出せる。つまりそれらは兆となりうる。あらゆることが兆となりうるということは、初めから兆として存在するものは少ないということである。大方のことは当たり前のこと、常識で理解できることである。しかしその当たり前のことが兆にもなりうると思ふべきである。したがって、災厄という兆化した事態が妖術を想念させ、そして妖術の想念が様々な事象や人物を一般常識や個人的常識ではわからないもの、つまり兆に変えるとみることはできないのか。私はこの兆の特性が妖術の物語の出来事性に関連していると考える。

妖術の物語は、災厄という兆を核に、様々な兆化した事象や人物によって構成されている。これらの兆の連鎖は、新たな兆の発見とともに変化しうる。注目したいのは、兆がいつでもどこにでも見出しうることである。したがって兆の連鎖の構成は、人によっても異なりうるし、事態の成り行きとともに変化しうる。一つの災厄が複数の兆ある事態と結ばれることもありえよう。例えばそれらが不可解な行動をとる複数の人物である場合、妖術使いの容疑者が複数いることになる。ムァディガ夫妻はこのケースに当たるだろう。そうした場合の語り口は仮定法的にならざるをえない。妖術使いは、ヂネかもしれないが、コンボかもしれない。不審に感じさえすれば、人のごく些細な行動も十分兆的である。つまり兆ある人物の行動は基本的には普段と変わらないのであり、他人と大幅に違うわけでもないのである。いわば兆は人物を白から黒にするのではない。両義的なグレーにするのだ。したがって妖術使いの特定は嫌疑のレベルを超えることができない。それは妖術使いの正体は仮定法的にしか語ることができないことを意味する。

様々な事象や人物が兆化している世界は、不可解さに満ちた世界といえるだろう。そこでは驚きの情緒が喚起される機会が多いといえる。前述したように驚きは、不安・恐怖や

憎しみとも連なっている。温厚な隣人の普段と違うちょっとした仕草が不安を掻き立てる。見かけとは裏腹に、その隣人は内に邪悪さと敵意を秘め、攻撃する機会を窺っているのかもしれない。兆が喚起する恐怖はハリウッド映画のゾンビのような者の怖さではない。それは見えない恐怖である。

兆は妖術の物語の信憑性の根拠になっているが、容易に新たな兆が見出せることが、新たな物語の生成にも役立っている。唐突な物語の変調は、当事者が新たな事態や人物に兆を見出したことに起因する場合もあろう。ペンデカ、バラバラ、そしてペンデカの息子たちの物語の変化は、年頃の孫娘がいまだ嫁入りしていないという奇妙な事実への言及がきっかけとなっている。新しく生成される物語がすぐに信憑性を獲得するのも、容易にその根拠となる兆が見つかるからである。試罪施術がローチャを捕えると、それまでローチャを強く疑っていたわけでもなかったメモランダが、息子ズングが死んだ日、ローチャがズングにタバコを買いに行かせているという奇妙なタイミングについて語り始める。バラバラがジェファの屋敷の探索に失敗し、妖術使いジェファにバラバラが敗北したという物語が生まれるが、バラバラ一行を退散させた突然の豪雨について、人々はこの物語の正当性を裏付けるかのように語った。

同一の災厄に対し、個人やグループによって異なる兆が関連づけられることはおそらく珍しいことではない。息子の突然死に関し、当初のムアディガはヂネを疑ったが、それは、ムアディガが目にしたものが、ヂネの息子から硬貨をもらったその日に息子ズングが死んだという不可解な事実とおそらく無縁ではない。一方妻のメモランダはどちらかというところコンボに嫌疑をかけていたが、それはメモランダの気掛かりは、用もないのに何度も彼女らの家を訪れたコンボの行動であったことに関係している。本書は、二つの屋敷の人々が、互いの些細な行動や態度（挨拶しなかったといった）に不審を抱き、それぞれの不審な行動への対応がさらに不審感を深め、相互に相手を妖術使いとみなしていく過程を「合わせ鏡」の構造として分析している。そこでは二つの妖術の物語が「独り相撲的」に同時に形成されている。本書は、そこに物語の個別化を促すようなディスコミュニケーションがあると指摘する。しかしながらそこには、もう一つ重要なファクターがあるように思われてならない。すなわちいったん妖術の観念にかられると、人々は事態のなかに兆を探し求めるようになること、なぜなら兆以外に妖術の確たる証拠がないということである。

妖術は兆を措いて他にその存在を実感できるものがない。なぜなら実際には妖術が行われていないからだ、というのが本書の論点である。それは反照規定的循環性の概念によって分析されている。存在しない妖術を存在しているかのようにみせるものは、妖術が引き起こしたとされる様々な事象である。それは「妖術は存在する、なぜなら複数の事態がそれを示しているから」という思考回路である。これに対しこれらの事態には不可解な兆という共通項があるというのが私の主張だが、確かに妖術の存在は、少なくとも目でみて確認することはできない。妖術の実在を疑わないドゥルマであっても、妖術使いが今まさに妖術を行っている現場、妖術が対象に働きかける過程、そして妖術が効果を顕す過程をみることができない。しかしながらこの妖術の実像の不可視性が、人々の兆に対する感受性

を否応なく高めるのではないだろうか。高い感受性のもとで兆は容易に発見される可能性がある。人々はいわば兆の背後に妖術の影をみるのである。

妖術の不可視性は、妖術の物語をつくるうえで、つくり手にかなりの裁量の自由を与えている。兆以外に確たる証拠がなければ、語り手が事実性をさほど気にせず語ることができるに違いない。次々に兆化していく事態を受けて、妖術の物語を比較的自由に構成できることが、物語の多様化や変化と関連している可能性は十分ある。

それにしても妖術を前に、現実はいともたやすく兆化してしまう。兆と妖術の関係についてさらに踏み込んで検討する必要があるようである。

#### 2-4 偶然と必然の同一化

前述したように、兆とは不可解で理不尽な事態、現実構成的想像力や個人的常識に依拠した通常の筋書が成り立たない状況である。この状況に導入されるのが妖術の筋書である。この通常の筋書が成り立たない状況について、いささか思弁的になるが検討してみたい。

本書が現実構成的想像力の筋書の例として取り上げているものに、「買い物の筋書」がある。この筋書は、「～は〇〇である」という主語と述語の同一化の表現形式で表すなら、「店は買い物をする場所である」といったところだろうか。これは主語と述語が同一のものであることに疑問の余地がない命題である。つまり当たり前のことであり、必然的なことである。しかし命題の必然性は実存状況のなかで確認されねばならない。それが確認されない命題にはそもそも必然性はない。それは筋書に沿った物語をつくり、実践を通してそれを現実化できるかにかかっている。そしてそれが常にできることが命題の必然性の根拠になっている。どの店に行っても買い物の筋書が当てになること、それを当てにして店に入り、実際買い物をして出てくることになることが、買い物の筋書の必然性を保証している。「A店もB店も、他のすべての店も買い物をする場所である」という同一化の物語をつくることができなければならない。

これに対し筋書が成り立たない事態とは、筋書の同一化の定式に合わせて物語が構成できないことである。本書は強盗を例にあげているが、例えば、「ある店に入ったら、買い物をするどころか強盗に遭い、会社から預かっていた金をすべて盗まれた」などといった事態がそれに該当するだろう。この店に関する限り、「店は買い物をする場所である」という筋書は成り立たない。この筋書に必然性があるとみなされている以上、それは筋書の必然性からの逸脱、そうある必然性のない偶然的な状況である。

ここで私の偶然性の概念は九鬼周造の哲学に多くを負っている [九鬼 2000]。残念ながら詳述する余裕はないが、以下の点だけは指摘したい。九鬼にとって偶然は必然の裏面であり、一方なしには他方が存在しえない関係にあるとみる。必然とは「～は〇〇である」という同一化の定式に疑問の余地がないことである。「～は〇〇になる」、例えば「水素と酸素を化合すると水になる」といった因果関係も、それが間違いなくそうであるなら、同一化の定式に置き換えることができるという。これに対し偶然とはこの同一化が成り立たないもの、「～は〇〇であるとはかぎらない」状況を表す。

九鬼によれば、偶然性には三つの側面がある。一つ目の偶然性である定言的偶然性は、

一般法則や概念としての必然性の裏面、それらから洩れる例外、つまるところ唯一無二の個物を指す。偶然の空間的特性は個である。二つ目の仮説的偶然性は因果関係・目的手段関係としての必然性の裏面、これらの関係が成立しえないもの、究極的には二元（またはそれ以上のもの）の邂逅である。邂逅はその一瞬で起こることから、九鬼は偶然の時間的特性を瞬間とみる。そして三つ目の離接的偶然性は、全体としての必然性の裏面、つまり部分である。部分とは他にも部分があること、つまり自らのオルターナティブがあることを前提とする。

九鬼は実存するすべての事象には偶然性があるとみる。実存するあらゆる物は唯一無二の個として存在し、その存在に因果関係を見出すことができようとも、その発生史をさらに遡るならどこかで二元の邂逅を見出すことになる。その邂逅がなければそれ以降の歴史は、したがってその物は存在しないことになる。私はこの点を重視したいと思う。もしあらゆる実存状況に偶然性があるなら、われわれはいつでもどこにでも偶然性を見出すことができそうである。今日の前にある一片の消しゴムにも、窓の外を一羽のカラスが横切っていたことにも、恋人との出逢いにも、偶然性をみとめることは可能なのではないだろうか。そうした偶然との出逢いとは、不可解な驚くべきこととしてしばしば経験されるに違いない。九鬼は、偶然に伴う情緒は「驚き」であるという。この驚きの情には「何か変である」といった、必然からの微妙な逸脱に伴う感情も含まれよう。

こうした偶然性の属性は兆に当てはまる。すなわち兆の本質は偶然性である。ただし兆は「わからないが、何かある」と感じさせるものである。いわば兆は他者と結びつこうとする。それは偶然でありながらも、起こるべくして起きたという必然性を志向する。この他者の役割を果たすものの一つが妖術である。

妖術の物語を成り立たせているものは妖術の筋書である。この筋書が物語＝現実を構成しうるのは、それが当てになるから、つまり疑問の余地がない必然性があるからに他ならない。したがって妖術の筋書にも同一化の定式が措定できるはずである。これまでの議論から、妖術の存在の唯一の確かな証拠となっているものは不可解な兆である。したがって妖術の筋書に見出せる最も確かな定式とは「妖術は兆の原因である」ということになる。この命題は今や「妖術は偶然の原因である」に置き換えることができる。そしてもし九鬼がいうように、必然的因果関係において原因と結果は同一化できるなら、この命題はさらに「妖術（原因）は偶然（結果）である」といってもいいことになる。つまり必ず妖術が偶然を帰結するのなら、妖術とは偶然そのものとなる。しかしこの命題には問題がある。妖術には概念として必然性があるからである。

概念としての妖術は妖術使いやムハツソと連関をなし、筋書の核を構成している。これらは大方のドゥルマがほぼ同じように想念するイメージであり、そこには九鬼が定言的必然性と呼ぶ一般性がある。これに対し偶然とは一般的概念の当てはまらないもの、普通でない例外的なもの、奇妙で異常なもののことである。したがって「妖術は偶然である」とは一般性・概念性のあるものが、一般性・概念性の成り立たないものと同一であること、すなわち「必然は偶然である」を成り立たせてしまう。それはまた「妖術は偶然である」と同時に「妖術は必然である」ことを意味する。これは論理的に矛盾しているとしかいい

ようがない。しかしながらこの矛盾した特性こそ、私は妖術の本質であると考えている。

妖術の物語をつくることは、「必然＝偶然」という矛盾した本質をもった妖術の筋書を実存状況に当てはめることである。それはさしあたり次のようなプロセスを辿るとみることができよう。まず災厄という不可解で例外的な状況が、妖術という一般的なイメージを想念させる。これによって前者は後者によって引き起こされたことになる。つまり偶然的状況は必然的イメージと因果関係で結ばれる。これを偶然の必然化と呼ぶことができるかもしれない。いったん妖術を想念すると、今度は身近のありふれた当たり前の事や、身近なよく知っている人物の態度が不可解で奇妙なものに見え始める。すなわちそれまで必然的だった事象や人物のなかに偶然性が顕れる。これは必然の偶然化と呼べるかもしれない。妖術は偶然と結びつくことで、偶然を起こるべくして起きたもの、つまり必然に変える。しかしこのとき結びつく相手である偶然をつくってしまう。偶然によってのみ妖術は自ら必然である証を立てられるのである。

妖術が偶然を必然化し、必然を偶然化するということは、妖術が偶然的かつ必然的であることを意味する。私はこの矛盾が、妖術が不可視であることの根本的な説明になると考えている。もし妖術が不可解な事態を引き起こす様子が目で見えるなら、その事態は不可解ではなくなってしまう。そこにはもはや偶然性がない。あるのは必然化プロセスだけである。偶然は「よくわからない」ことである。白日の下に因果関係がありありと顕れていることに偶然性はない。しかし妖術が引き起こす事態には明らかに偶然性がある。ということは、妖術は見えるわけにはいかないのである。妖術の不可視性は偶然の不可知性に由来する。不可知的な偶然を引き起こすものもまた、不可視（知）的でなければならないのだ。

妖術の現実を生きるとは、偶然性を帯びた現実を生きることである。それが妖術の物語の高い出来事性も説明する。先に述べた出来事の特徴は、そのまま偶然性の性質と重なる。すなわち仮定法的語り口とは、それ以外の語り方、オルターナティブがあることを自覚した語り口であり、九鬼哲学における離接的偶然性を帯びていることを示唆する。変化前の物語と変化後の物語の間に強い因果関係のない断絶的变化は、そこに仮説的偶然性があることを示している。物語の多様化・個別化は、物語が一般性を欠いたもの、定言的偶然性の様相があることを感じさせる。

偶然を必然化するとともに必然を偶然化し、必然的な相貌の内に偶然性の不可知性をもつもの、それが妖術である。私はこの妖術の特性が施術にも当てはまると考えている。そしてそれは施術による物語の死と再生とも関連していると考え。最後にこれらの点についてみてみたい。

## 2-5 施術の奇跡

ドウルマの施術は、主として占い、治療、防御施術、試罪施術、そして抗妖術施術からなる。ここではまず治療と防御施術について、次いで占いと占いの要素をもった試罪施術と抗妖術施術について検討する。

一般に施術は想像に多くを負った妖術とは異なり、視覚や聴覚などの五感で存在を把握



できる具体的な物、イメージ、音や行動のあり方からなっている。治療と防御施術の場合、それらはムハツソ、瓢箪、鶏、コマンドの言葉、音楽、施術の手順などによって構成されている。これらのやり方の多くはスタンダード化されているようである。例えばフルモヨの妖術に対する施術クブェンドラにおいて、「冷やし」の操作、「罨」の設置、患者を捕えたムハツソに「放て」とコマンドすること等々は、スタンダードなやり方だろう。これらはドゥルマにとって、そうでなければならない必然性のあるやり方といえよう。

一方、本書はこれらの施術の最重要構成要素であり、妖術の核ともみなされるムハツソに関して、ドゥルマにとってそれは不思議 (*ririmo, rilinje*) を実現するものだと考察している。それは「人々の常識で理解できる仕方から外れた仕方で、通常のやり方では期待できないようなことを成し遂げること」である (80)。例えばそのやり方には、全裸になる、放尿する、不気味な物が地面から掘り出されるなどの演出がある。それらは、一般的な常識や通念からの逸脱である定言的偶然が、あたかも人為的につくられているかのようである。おそらく人々はこれらのやり方がなぜ効果につながるか、その因果関係については関心がない。むしろそれらの不思議さが、効果を期待させているのではなかろうか。

不思議さは施術が達成しようとするものにもある。それは様々な治療でも治らなかった異常な病の治癒であり、相次いで起こる不幸な事態をくい止めることであり、不審な死が起きないようにすることである。ようするにそれは不可解で偶然的な災厄を解決することである。解決しようとするものが不可解だからこそ、そんなことが解決できる方法もまた不思議で驚くべきものということになる。それは否定的な偶然の解決とは肯定的な偶然であることを示唆する。ナイジェリアのペンテコステ派のキリスト教信者は、自らの施術を「奇跡 (miracle)」を起こす手段とみなすが、そこには普通はかなえられないことをかなえるという意味合いがある。現実構成的想像力に依拠した方法では達成できない肯定的な偶然を「奇跡」と呼ぶことができるなら、ドゥルマの施術もまた「奇跡」を起こす術とはいえないだろうか。そうした施術は賭けによく似ている。

賭けは確率に依拠して行われるわけではない。確率論的にいえば賭けはしないに越したことはない。例えばサイコロ賭博で3の目に賭けるというときに、少なくとも実験的環境では、3が出る確率は6分の1ほどであり、そこに大金を賭けるのはあまり賢明とはいえないだろう。それを承知でサイコロを投げる賭博師の心情とは、「まだサイコロを振ってない以上どの目が出るかはわからない。6が出るかもしれないが、3が出るかもしれない」といったものだろう。賭博師にとって大事なことは、今ここで振ろうとしているサイコロの目がどれになるか「わからない」ということである。それは科学をもってしてもわからない。なぜならそれは因果関係において捉えることも、一般的な法則から演繹することもできないからである。つまりこの不可知性は、それが偶然であることに由来する。賭博師は不可知の偶然に希望を抱いているのだ。結果は確率論者の予想通り、大抵外れることになる。しかし賭博師が賭けを止めることはない。失敗したのは今ここでやった賭けである。この失敗に理由はない。偶々失敗したのである。したがって今度あそこでやる賭けは成功するかもしれないのである。つまり次回の不可知な偶然に希望がつながれるのである。この結果、賭けはそのつどやり直されるもの、反復されるものとなる。したがって

賭博師は始まっては終わる出来事を繰り返し生きているとってよからう。

不可知な偶然が「起こる」ことを希望して行うのが賭けなら、不可知な偶然を「起こす」ことを希望して行うのが施術である。それは人為的に奇跡＝偶然が起きるようにする術、偶然を起こるべくして起こるものに変えようとする、必然化の試みである。いうまでもなく、そこにはドゥルマの筋書がある。それは例えば「不可解な災厄を引き起こしたのは妖術である。したがって妖術を無効にすれば災厄から解放される」といったものだろう。この筋書には概念的な必然性がある。それはドゥルマであれば誰もがそう想定するはずの内容を有している。それはまた上述したスタンダード化された方法や材料を伴う。しかしながら、私がここで強調したいのは、施術はそれが行われるその時その場において力を発揮するものではないかという点である。クブエンドラでは患者を捕えたムハツソに対し、患者を「放て」とコマンドするが、効力が期待されているのはその時その場で行ったコマンドである。したがって施術は時間的空間的に限定的な力である。それが本当に効くかどうかは、その時その場にならなければわからない。それは予測を可能にする因果関係や一般法則から逸脱している。ようする施術にも賭博性がある。筋書に想定している概念的因果的必然性にもかかわらず、施術は賭博的であり、偶然性を帯びているといわざるをえない。偶然を必然化する施術は自ら偶然化している。ここには妖術と同じ構造がある。したがって施術にも偶然性に由来する根本的な不可知性があるに違いない。

筋書上、施術の直接の目的は妖術を無効化することにあるとみてよからう。具体的には、「罨」にはめる、埋設薬を掘り出す、そして患者を解放するようコマンドする等々のやり方が実践される。しかし重要なのは、筋書に、これらのやり方をするとなぜ妖術が「オフ」になるか、その因果関係の連鎖について触れられているようには思えない点である。なぜムハツソは「放て」というコマンドに従うのか、そんな理屈は不問にふさげられているのではないか。また施術では、妖術を無効にする姿が具象化されており、それを演技していくことが、そのまま妖術の力を無効にするとみなされている。つまり施術において手段と目的は明瞭に分化していない。そして実際に施術が妖術を無効にしていく様子は見るができない。すなわち施術の根本に、因果関係を問えない、手段－目的の整合性を問えないという不可知性がある。

効果は災厄がなくなるという奇跡、つまり肯定的な偶然が起こったかどうかで判断される。しかし奇跡はそう簡単には起きるものではない。ここで指摘したいのは、この失敗は賭けの失敗と同じように偶然的であるということである。施術は偶然を起こすべく今ここにかかる力である。失敗は今ここでやった施術の問題である。また失敗を反省しようにも反省すべき因果関係や目的手段関係が筋書から欠落している。したがって失敗は、次回あそこで施術すれば、奇跡が起きるかもしれないという希望につながっていく。こうして施術も繰り返されていくのではなかろうか。施術を繰り返す人々もまた、人生をそのつどやり直される出来事として生きている。それは偶然の必然化、必然の偶然化という施術の特性が導く生き方である。そしてこの特性は占いや占いの要素をもった施術にもみられる。

試罪施術は占いの一種とみてよからう。それはエヴァンズ＝プリチャードが毒占いと呼ぶ、アザンデ人のベンゲと同じ方式のものである [エヴァンズ＝プリチャード 2000]。

ベンゲ託宣では植物から抽出されたベンゲという物質をヒヨコに飲ませ、パパイヤのキラボでは葉をパパイヤに塗ったものを人に飲ませるといった違いがあるものの、ともに飲ませた物質が、飲んだものに及ぼす影響で託宣する。妖術使いを判定する最上級審的な役割を果たしている点も共通する。エヴァンズ＝プリチャードはそのベンゲに関して注目すべき指摘をしている。それはベンゲを人為的に操作することは難しく、だからこそベンゲには信憑性があるというものである。ヒヨコの生死の確率はほぼ5分5分だという。つまり外部の観察者にとって、特定のヒヨコが死ぬか生きるかは偶然の問題である。ところがその偶然性が、アザンデにとってはベンゲによるお告げ以外の何ものでもないこと、ベンゲの必然性を表している。

古今東西、占いは偶然性と密接に関連している。大方の占いは人為的に操作しがたい方式が取られている。それは人為を超えたものの答えを得るために必要な手続きなのではないだろうか。大吉ばかり当たる神社の御神籤は、人為的なものを感じさせる。パパイヤのキラボにおいても告発者と被告発者の口が腫れる割合に大きな隔たりはない。キラボの場合、人為的操作を完全に免れているとはいえないかもしれないが、それがあからさまに操作可能なものなら信用を失うに違いない。したがってそこにはキラボの神秘的答えと直結するような偶然の戯れがあるのではないか。託宣とは偶然の相貌に神秘的必然性をみることである。

したがって占いの本質は兆と同じものである。現実の兆化については述べたが、それはある程度まで現実の占い化といいかえることができよう。物事や人物が不可解で何かを暗に示しているかのようにみえるとは、それらは読み解くべき占いのように立ち現れているとみることのできるのではないか。ドゥルマもそしてアザンデも、しばしば現実を占いのように見ている可能性がある。それは現実の個別性、意外性、代替可能性に意識を集中することで不可解な偶然性を見出すことである。しかし兆しと占いには重要な相違点がある。

占いは兆と異なり、それが何を意味するのかを読み解く方法、当てはめるべき比較的明確な筋書が用意されている。それは大吉、中吉、小吉というように結果ごとに違うものである。ヨルバ人のイファ占いにいたっては、256通りのオドゥと呼ばれる答えのそれぞれに筋書がある。ところでイファ占いにおいて、同じ結果が続けて出るとは稀である。このことは占いの真理の本質に関するヒントを提供している。

もし真理が一つなら、同じ質問に対する占いの答えは毎回同じはずである。ところがイファ占いに限らず、そうしたことが起こる可能性は少ない。一方、占いの正当性に微塵の疑いも感じていない者がいるとすれば、彼（女）は個々の占いの結果をそのつど真実として受け取るに違いない。このことは占いの真理が偶然性であることを示唆している。占いの真理とは根本的には、それを行うその時その場の真理である。

実際のところ占い師は、占いの結果を受け、それに該当する筋書をもとに物語を作っていく。このクライアントに応じてつくられる物語は、ある程度まとまった内容をもっている。占いは一人のクライアントに対し何回か行われることを考えると、占い師は、質問や解釈を変えるなどして、巧みに複数の筋書からまとまりある物語を作っていく。ところが

クライアントの問題が長引き、占い師のもとを何度も訪れるようになると、物語の一貫性は失われていく可能性がある。私はナイジェリアの調査地で、ビジネス上の問題を抱えた一人のクライアントに対する占い師の対応を、1年ほど追ったことがあるが、その占い師の語る物語の内容は著しく変化した。

占いの物語は、事実上クライアントとの交渉の中でつくられていく。一般に交渉は、事前にどう決着するか見通しのきかない言葉のやり取りである。交渉のテーブルに着くまで、つまりやってみなければどうなるのかわからないのが交渉である。こちらが何を言うかは、相手の出方に応じそのつど決まるものである。妥協点が模索されるが、その妥協点はしばしば偶然の産物である。占いのコミュニケーションにはこうした交渉性が高いと考えられる。おそらくドゥルマの憑依霊による託宣ムブルガには、こうした交渉性があるのではないか。また同一の問題に関する占いの答えが、占い師に応じて異なる可能性もある。本書はドゥルマが複数の占い師を梯子することで、妖術使いの特定が困難になることを指摘している。

結論的に占いとは、偶然を具象化し、そこに神秘的必然性をみるという偶然の必然化の過程である。しかしそこで明かされる必然は結局のところ偶然性を帯びている。占いもまた必然化と偶然化が同時に現出する過程である。

これに対し試罪施術は恒常的な真理を確立することができるかのようなものである。この真理の安定性は、試罪施術が1) 公的なこと、2) それを行える施術師が少ないこと、3) 事実上繰り返し行えないこと、4) 地域住民の広範な支持を獲得すること、そして5) 有罪が確定した者は村を出て行かねばならないことに、間違いなく関連している。試罪施術は、長老の許可を必要とし、その結果には権威がある。それは施術師なら誰もが行えるものではない。苦痛を伴い、死ぬ可能性すらある試罪施術は何度も行えるものではない。公表され権威を伴う施術の結果に、人々は正当性を付与しやすいだろう。自らの災厄をも関連づける傾向がある。そして妖術使いと確定された者は事実上抗弁することが許されず、村を去ることになる。Bタイプの抗妖術施術は、このうち1)、4)、5)の条件を備えている。したがってこの施術による妖術使いの特定にも、比較的安定した正当性が付与されている。ようするに施術が明かす真理を支えるのは社会的・身体的諸条件といえよう。しかしそうした施術の真理ですら不安定性を孕んでいると、私は思う。

問題は、施術後、果たして施術の発端となった災厄が解決されるかである。すでに妖術使いと確定された者は、手を引く施術を終えており、彼は村を後にしているかもしれない。それにもかかわらず災厄が続いていたなら、それはどう理解することができるのか。実際それはマジユトやバラバラの抗妖術施術後に起こったように思われる。人々はこのとき今までの物語と断絶した新たな物語をつくっていった。そしてこの断絶的变化が矛盾なく起こるのは、そもそも施術のつくる物語の真理が、その時その場という時間的空間的限定性を負った偶然的な真理であるからに他ならない。したがって施術のつくる物語＝現実が偶然性を帯びていることこそ、施術ごとに物語が完結し死を迎えることの根本的な説明になるのではなかろうか。

## 2-6 結論

本書は妖術信念が人々を呪縛していく過程をみごとに辿っている。それは人々が妖術の筋書に沿って物語をつくり、実践を通しそれを現実に変えていく過程である。私はこの過程を、妖術の筋書の同一化定式に沿って現実を構築する、必然化の過程として捉えた。しかし妖術的必然化の過程は、慣れ親しんできた現実の偶然化の過程でもある。それは妖術が同一化しようとするものが偶然的兆であることに起因する。私は、この必然化と偶然化が同時に進行することこそ、妖術をはじめ、神秘的な力に関する信念、つまり宗教的信念の特性があると考えている。このことは、現実を存在の様相とでも呼ぶべき観点から探究することの意義を示唆するものと思われる。

本書の理論的アプローチは現象学に接近している。現象学は世界の現象をその起源において明らかにしようとする企てである。この哲学は、例えば、われわれがある物を見て、それは机だと思えるようになるプロセスに関心がある。それは疑問の余地なく「～は○○である」と思えるようになる過程の探究ともいえよう。この哲学的課題は現象学的な社会学や人類学にもある程度受け継がれている。病院で見ず知らずの白衣を着た人に注射を打たれるのをそれほど不安に思わないのは、疑問の余地なく「この人は看護師である」と思えるからに他ならない。こうした個々の人々の行動を、予測可能な一般性においてとらえるスキームを、シュッツは理念型と呼んだが、それは本書の「筋書」の概念と重なるものである [Shutz 1967]。

妖術は、この理念型によって上書きされるはずのところ、そうならなかった個々の事物や人々に、つまりこれらの偶然性に当てはめられる。しかしそれは偶然的状況を妖術的必然によって上書きする、置き換えることを意味しない。妖術はいわば偶然的状況の背後にまわって偶然的状況を際立たせてしまうのである。妖術の現実を生きるとは、問題化した不可解な現実を生きることである。そうした生はそのつど生き直す出来事性を帯びている。すなわち「～は○○である」ことが確かでない、あるいはそれが繰り返し設定し直される現実である。私には妖術が、現象学的探究の方向性の再考を迫るような領域であるように思われてならない。そして妖術的現実の特性を浮き彫りにするのに、物語的現実の構築というアプローチを、さしあたり偶然、必然、(そして可能、不可能)といった現実の存在様相の観点で補うことも、まったく無意味なこととはいえないのではなかろうか。

### <謝辞>

この書評に関し特別にお取り計らいくださった編集部の中中雅一先生と石井美保先生に感謝いたします。

### <参考文献>

- エヴァンズ=プリチャード、エドワード エヴァン 2000 『アザンデ人の世界』 向井元子 訳、みすず書房。  
 九鬼周造 2000 『偶然性の問題・文芸論』 燈影舎。

Shutz, Alfred 1967 *The Phenomenology of the Social World*. Evanston: Northwestern University Press.